



ふたつの“北の大地”で情報リテラシー教育を考える

メタデータ	言語: ja 出版者: 大学図書館問題研究会 公開日: 2015-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 千葉, 浩之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3795

.....
特集：海外に目を向ける

ふたつの“北の大地”で 情報リテラシー教育を考える

千葉 浩之

.....
1. はじめに



写真1 Helsinki University Library 最上階のテラスからヘルシンキ大聖堂（中央）と国立図書館（右）を望む

好きなテーマについて海外で調査・研究を行えるとしたら、どんなテーマを選び、どこを訪れたいだろうか。

幸いにもそうした機会に恵まれ、私は2013年11月に北欧フィンランドを訪問した¹⁾。実質5日間で大学図書館4館と公共図書館5館を巡るという慌ただしくも楽しい日々から

1年3か月。気が付けば勤務先も担当業務も変わってしまった。だが時間を置くことで見えてくるものや今だからこそ言えることがあるかもしれない。貴重な誌面を頂戴して恐縮ながら振り返ることにしたい。

2. なぜフィンランド？

北海道大学附属図書館で働いていた2013年1月、上司から国立大学図書館協会海外派遣事業への応募を勧めていただいた。同事業は応募資格こそあれ、応募テーマは大学図書館が抱える課題であれば自由。しかし海外研修未経験で日頃意識することもなかったため、2週間ほど冒頭の問いを繰り返した。勤続9年目の中堅職員として、これはかなり恥ずかしい。

当時の所属部署は調査支援担当。国際資料の管理とレファレンスが主な仕事で、補助的に情報リテラシー教育やカウンター業務を行っていた。「国際資料」とは国連やEUの公式資料のことで、北海道大学附属図書館が国連寄託図書館およびEU情報センターの指定を受けていることから寄託ないし寄贈されていた。だが、これらの資料はほとんど見向きもされないうえに大半がウェブで公開されている。管理も大事だがまずは知ってもらうこと（広報）、そしてウェブでの探し方を伝えること（ある種の情報リテラシー教育）が

必要ではないかと常々考えていた²⁾。

ところで、EU 情報センターは毎年駐日欧州連合代表部より交流イベント「日・EU フレンドシップウィーク」に何か企画を出すよう求められる。話が少し遡るが2012年6月にEU加盟国からフィンランドを取り上げ、学内外の個人や団体を巻き込み、「フィンランド展 ～もうひとつの“北の大地”へ飛び出そう～」を開催した。

応募テーマを定められないなか、この企画を思い出し、文献を集め、お世話になった教員やフィンランド人に改めて話を伺った。フィンランドは初等教育のみならず高等教育も国際的に評価が高い。図書館の先進性も注目されており、大学図書館も情報リテラシー教育に積極的に取り組んでいる。情報リテラシー教育にはこれまで補助的にせよ関わっており、国際資料（個人的に最もオープンアクセスが進んだ分野だと思っている）を通してその必要性を感じていたため、これをテーマの軸とし、図書館の教育的役割や学習支援と絡めて応募した。幸運にも採択され、「もうひとつの“北の大地”へ飛び出」すことになった。

経緯が長くなってしまったが、以下にフィンランドの大学図書館における情報リテラシー教育について紹介したい。

3. 国を挙げた情報リテラシー教育の取り組み

大学のカリキュラム改訂を翌年に控えた2004年、フィンランドの大学図書館は情報リテラシー教育を新カリキュラムに含める提言を行った。この提言は教育省（当時）の支援を受けたものだが、その背景には大学図書館が情報リテラシーの重要性を政策決定者たちに説き続けてきたことが功を奏したと言われている。

この提言は大学に対する要望のみならず、大学図書館にとって情報リテラシー教育を進めるうえでのガイドラインという側面もあっ

た。ここでは情報リテラシー教育を新入生、学士、修士の3段階にレベル分けし、それぞれで教えるべき事柄をやや抽象的ではあるが明記している。これによりそれまで大学によって取り組み方がまちまちであった同国の情報リテラシー教育が本格的に始動することになった。訪問時は提言から9年が経っていたが、大学によってはさらに高次のレベルとして博士ないしは研究者レベルを見据えた取り組みがなされていた。

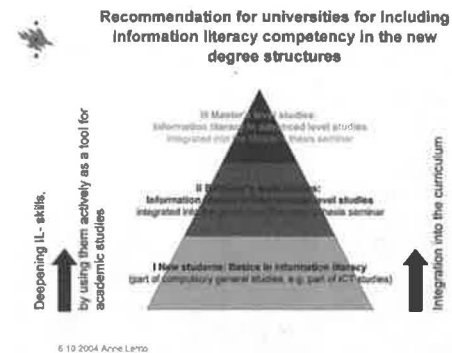


図1 提言を図式化したもの

情報リテラシー教育と言えば初年次学生への学習支援というイメージが強かったため、レベルごとの教授内容をしつこく尋ねてみた。だが今になって思えば、明確に線引きできるものでもなく、それぞれの課程で求められるものに応じて教えるということに尽きる。すなわち、新入生レベルではひとまず蔵書検索等を、教員からテーマを与えられる段階である学士レベルでは国際的な文献の探し方を、主体的な論文執筆に重点が移る修士レベルではそれに加えて引用方法等を、研究生を送る博士や研究者レベルでは最新の研究動向を把握し、成果を広く発信する術を教える。

研究段階に応じて内容を高度化させることにより情報リテラシー教育が学習支援のみならず研究支援にまでつながっていると感じた。フィンランドで情報リテラシー教育を担

うのは「Information Specialist」という肩書の専門職の図書館職員だが、数年おきに異動のある日本の図書館職員が大学院生や研究者に「教える」のは難しいかもしれない。この話を振ると「もちろん専門分野の内容については研究者のほうが詳しいが、その分野での調べ方については私たちが詳しくて然るべきだ」との答えが返ってきた。日本においてはサービス部門が情報リテラシー教育を担うことが多いが、研究者向けには学術情報の流通に明るい部門の出番かもしれない。



写真2 Oulu UniversityのScience and Technology Library Tellus (Information Specialistのガラス張りのオフィスが併設され、情報検索の相談ができる)

フィンランドには情報リテラシーに関するネットワーク (Information Literacy Network of Finnish University Libraries) があり、Information Specialist たちの協働や交流を支えている。これは2004年に結成されたもので現在も「業務の合間」でこそあれ活動を続けている。2013年には上述の提言を改訂し、社会における情報リテラシーの重要性を強調し、予算要求も含めた強い姿勢を打ち出している。

4. 「図書館の仕事」を越えて

次に個別事例として Helsinki University Library と Oulu University Library の取り組みを紹介したい。

Helsinki University Library は、情報リテラシー教育の一環としてデータマネジメント教育を始めた。研究データの名前の付け方、保存や共有の方法、プランニングについて教えると言う。「研究上重要であるにも関わらず、どこも教えていないので教えることにした」とのことだった。とはいえ教えられる確信があって始めたわけではない。研究者を交えたワークショップを重ねることで知見を深めていったようである。

Oulu University Library は研究者に対する情報リテラシー教育を行う場を創出すべく、学内の関連部署に声を掛けて「Toolbox of Research (以下、ToR)」という Wiki を立ち上げた。「いくらお金を持っても2か月に一度しか会えないようなヤツじゃ駄目だぜ」と Information Specialist 自ら予算調達に奔走した経験を語っていた。

ToR には図書館を含む研究支援系の部署がノウハウを書き込む。研究者はここにアクセスすれば、研究資金の獲得から文献検索(図書館が担当するのは主にこの部分)、論文執筆、成果の社会還元に至るまで、研究活動にまつわるあれこれの方法を知ることができた(残念ながら現在はページが分割されている)。

どちらの事例もいわゆる「図書館の仕事」ではないという意見があるかもしれない。しかし、特定の研究分野を持たない図書館だからこそできる大局的な取り組みとも言えよう。とりわけ研究データについては図書館のニュートラルな立ち位置は貴重とされる。また、国内でも連携や協働の重要性が認識されて久しいが、大学の教育・研究への眼差しと積極的な働きかけ(図書館だけではできないからこそ連携するのだという意識)が大切だと感じた。なお、ToR は2010年に欧州研究図書館協会 (LIBER) の LIBER Award for Library Leadership を受賞している。

5. フィンランド訪問から1年3か月が経って

訪問から4か月あまりが過ぎた2014年4月に北海道大学から室蘭工業大学に異動した。引き続き“北の大地”で働いている。本学の図書館は総務ユニット、運用ユニット(閲覧やILL等を担当)、私の所属する学術情報ユニット(システム管理や雑誌契約等を担当)の3係体制。非常勤職員も含めてスタッフは9名。初年次学生への図書館利用教育は運用ユニットが頑張っているものの、フィンランドで言うところの「学士レベル」以上の情報リテラシー教育は課題と言える。

情報リテラシーに関しては現在、国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会において「高等教育のための情報リテラシー基準」が策定されている。私はそのドラフト3を読んだにすぎないが、この基準はフィンランドにおける提言とは趣が異なるものの、私たちに情報リテラシーに関する共通認識を与えてくれるだろう。

この基準をどのように現場へ活用するかは大学によって異なる。だが規模や研究分野が近ければ参考になる部分が多いと思われる。工科系単科大学に勤める者として同じような立場の方と同基準の感想や活用へのアイデアを出し合えれば嬉しい。大学を越えて連携できる部分もあるかもしれない。

ところで、フィンランドの大学図書館は研究課程に寄り添った情報リテラシー教育を行っているが、個人的にはこれを新入生以前に遡ってもっと広く捉えてみるのも実りがあるのではないかと思う。小中高の学校図書館は児童・生徒のリテラシー向上のためにどのような取り組みを行っているか。大学図書館が情報リテラシー教育を始めるにあたり背景として押さえておく点はないか。

学生に目を向けるならば、大学から社会への巣立ちも考慮したい。社会人として知的活動を続けるためのヒントやガイドあるいはおさらいを提示して送り出せないものだろうか

(たとえば東京大学は「卒業してからの文献検索・文献管理」というガイダンスを行っている)。卒業していく学生に対して図書館からの饒の言葉が「3月中に忘れずに本を返すように」では寂しくないだろうか。

6. おわりに

海外研修に設定したテーマがテーマだけに話が大きくなってしまった。だが海外研修に出掛けるということは、水平方向に視野を広げる(外国の図書館事情を知る)だけでなく、垂直方向に思いをめぐらせ(国内の問題を考え)、さらにそこから先へ行動を起こすチャンスでもあるように思う。

フィンランドの図書館事情、教育事情について言えば見聞したいトピックは尽きない。同国の大学図書館で最も情報リテラシー教育の普及に成功している Tampere University Library。学生と協働して(むしろ学生が主体的に)キャンパス内に新たな学習環境をデザインするプロジェクト「Learning Hub」を展開している Aalto University。新しい中央図書館が2017年(ロシアからの独立100周年にあたる)に上棟、2018年に開館予定の Helsinki City Library。

さて、これから大学の国際化が進み、図書館職員にとっても海外研修の機会は増えるだろう。そうしたチャンスを前にして私たちを尻込みさせる最大の要因は、語学力の不足(実は全然不足していない!)ではなく、テーマの埋没、すなわち海外で学びとりたいものが日々の忙しさの中に埋もれてしまっていることではないだろうか。そこで拙稿を締めるにあたり、若手の方に向けて、そして自戒を込めて冒頭の問いを繰り返したい。

好きなテーマについて海外で調査・研究を行えたとしたら、どんなテーマを選び、どこを訪れたいだろうか。

1) この訪問に関するレポートは下記のウエ

ウェブサイトに記載されている。

<http://www.janul.jp/j/operations/overseas/result.html#H25-1>

(最終アクセス 2015 年 2 月 26 日)

2) 「常々考えていた」結果として講習会「国連情報入門」を行った。

<http://hdl.handle.net/2115/52583>

(最終アクセス 2015 年 2 月 26 日)

(ちば・ひろゆき／室蘭工業大学図書・学術情報事務室 chiba@mmm.muroran-it.ac.jp)